

# ホリスティックなダンス教育における ストリングラフィの試行

A Trial Practice of STRINGRAPHY in Holistic Dance Education

廣 兼 志 保  
Shiho HIROKANE

キーワード：ダンス教育 ホリスティックな教育 体育科教育 プログラム開発

## I はじめに

### 1. 実践の背景と目的

本稿は、平成9年度から3ヶ年計画で実施中の文部省科学研究費補助金（萌芽的研究）「心身の感性を育てるダンス教育に関する実践的研究—ホリスティックな体育科教育プログラム開発にむけて—」の中間報告としてまとめたものである。

上述の研究課題において、筆者はこれまでホリスティックな教育観すなわち「論理的思考と直観」「こころとからだ」「知の様々な分野<sup>①</sup>」「個人とコミュニティ」「自我と自己」各々の関わり合いとつながり合いを重視した教育のあり方を志向し<sup>②</sup>、「身体活動」を切り口に、それらの具現化の方法について研究をすすめてきた。

そして、それらを具体化する教育プログラム開発にあたっては、学習者の外的活動すなわち学習により修得された身体活動だけでなく、内的活動すなわち学習者が体験した活動から形成された内的感情についても、学習の成果として重視することとした。

前年度までの段階で、筆者はこのような教育理念に合致すると思われるホリスティックな教育活動または社会活動における教育理論書や教材の中から身体活動を伴うものを収集し、併せて講習会等によりそれらの活動を体験するなど、調査・検討を行った。その結果、身体活動を中核とし、ボディワークセラピーや環境教育・非暴力の教育などの理念ともリンクした「生命の教育<sup>③</sup>」としての体育教材の開発・試行の可能性が見出された。

今年度はその結果をうけて、リラクゼーション・ボディワークセラピー・ネイチャーゲーム・協力ゲーム・イニシアティブゲーム・イメージワーク・運動遊びなどを応用した体ほぐしまたは一連のダンスプログラムの試作に着手した。次いで、試作されたプログラムの実践を大学の初等専門科目の授業において試みた。プログラム作成においては、以下の事柄に留意した。

- ①身体活動においては競争的な要素よりも協力的な要素を重視し、導入する。
- ②個々の運動については既成の型を修得させることよりも学習者自身が感じたままに動くことを尊重し、支援する。
- ③即興的な創造活動の場を保障する。
- ④実践にあたっては、学習者の内的活動である直観・体験・認知・考察が個々の学習者の中

・ 島根大学教育学部保健体育研究室

で互いに関わり合いつながり合えるような場づくりをする。具体的には、毎時限の展開の中にアクティブに活動する場・リラックスする場・フィードバックする場を設定し、学習者のからだところのエネルギーの流れに応じてそれらの場を配置する。また、これらの体験を通して得られた気づきを意識化する場を保障する。

⑤各個人の体験や気づきを仲間と共有できる場を保障する。

また、教材の選択においては、とりわけ「身体感覚の気づき」「生命への畏敬の念」「非暴力によるコミュニティ形成への態度」の形成を促すような内的感情を、身体活動を通して体験または表出できるようなものが望ましいと考えた。

本稿では、以上のような理念的背景を持った教材を実践した結果、学習者がどのような感想や気づきを得たのか、その実際を明らかにすることとする。

## 2. スtringグラフィの特性

本稿では、上述の授業における一連の実践の中から「Stringグラフィ」をとりあげた。

Stringグラフィは、1992年に作曲家水嶋一江によって開発されたパフォーミングアートの一種である。水嶋は、劇場・美術館・フリースペース等でStringグラフィを上演し、ダンス・音楽・造形美術など多ジャンルの芸術家たちとコラボレーションを行っている<sup>2)</sup>。

Stringグラフィは糸電話の原理を応用し、絹糸の両端に紙コップをつけたものを用いて演奏するものである。糸をこすったりはじいたりすると、コップがスピーカーの役割を果たし、音が鳴るようになっている。

その音色は、自然界の雑音とアコースティックな楽器音との中間にあたるといえる。したがって、演奏のしかたや聞く人によって、音のイメージが多様にふくらむという特徴がある。

演奏においては、糸を様々な方向に張り巡らすことによって、あらゆる方向から音が聞こえてくるような効果をもたらすことができる。糸電話は、定位置に固定することも、固定しないこともできる。

また、糸とコップの配置によって、空間を視覚的にデザインすることもできる。複数の糸電話を設置することにより、空間を様々な移動しながら演奏することも可能である。糸電話を固定せず両端を人が持つようにすれば、パフォーマーはさらに多様に空間を移動しながら演奏することが可能になる。

このように、Stringグラフィは、音・空間・動きを様々なデザインしそれらを同時に組み合わせることによって、多様な表現を工夫することができるという特徴もっている。すなわち多領域にわたる芸術的要素が互いにつながり合い関わり合って一つの表現活動を形成しているといえる。このような特性は、「つながり合い」「関わり合い」を重視するホリスティックな教育理念にも合致する。

また、糸や紙コップといった素材の確保が容易であり、簡単な手作業で用具の製作や設置ができることから、Stringグラフィの活動においては「つくる—演じる—鑑賞する」というパフォーミングアーツのプロセスをまるごと体験することができる。

以上のような特性から、ホリスティックなダンス教材の一つとして、Stringグラフィをとりあげ、実践することとした。

## II 研究方法

### 1. 対象となる授業実践について

#### (1) 授業の位置づけ

本実践は、平成10年度前期に、島根大学教育学部専門教育科目における体育科に関する初等科目「ダンス」の授業の中で行われたものである。

#### (2) 学習者の属性

島根大学教育学部小学校教員養成課程4年次生10名及び同特別教科（音楽）教員養成課程4年次生1名の計11名である。

性別による内訳は、男子6名、女子5名であった。

#### (3) 実施期間

上記の授業は、平成10年4月20日から7月13日まで、週1回90分間ずつおこなわれた。授業日程と活動の概要は、表1に示す<sup>※3</sup>。

本実践は第2時にあたり、平成10年4月27日に実施された。これは授業担当教官が企画し、指導したものである<sup>※4</sup>。

表1 授業日程と活動内容

Lec.1 オリエンテーション	Lec.5 「布のキャッチボール」 「歩く」 「ボディパーカッション」	Lec.9 「人間知恵の輪」 「からだであやとり」 「ゴムとからだで立体図形を創る」
Lec.2 「ストリンググラフィ」	Lec.6 「布遊び」 「布を使った身体表現」	Lec.10 「地蔵倒し」 「呼吸と共に行こう」 「イメージを感じ合って仲間の動きに同調する」
Lec.3 「ボールを使って」 「重さのイメージワーク」 「コンタクトインプロビゼーション」	Lec.7 「相手の動きに反応する」	
Lec.4 「アクションペインティング」	Lec.8 「ボールを使ったリラクゼーション」 「リズムをからだで表現」 「リズムを感じて動く」	

この他、毎回の授業の前後にリラクゼーションとして腹式呼吸による全身の漸次的解緊とエネルギー循環のイメージワークを行った。

## 2. 研究方法

学習者は授業後に本実践の活動を振り返り、感想を自由に記述した文書を提出している。学習者は活動を振り返り、そこで得た感想や気づきを言葉化するというプロセスを通して、自らの体験と反応を無意識のレベルから意識のレベルに掬い上げ、自分が体験したからだとこころの活動の意味に気づいていく。提出された感想文は、学習者がからだで体験した活動によって得られた気づきが言葉化されて現れたものであるといえる。

本研究では、この感想文を資料とし、以下の手順で分析を行った。

- (1) 学習者が提出したすべての文（合計86文）を1センテンスごとに分割し、整理番号をつけた。すなわち、11名の学習者をそれぞれA・B・C・D・E・F・G・H・I・J・Kと命名し、各学習者の文に、記述順に番号を割り振ってセンテンス番号とした。なお、センテンス番号は、各センテンスの後に（ ）内で示した。
- (2) K J法をもとに記述主題の共通性に着目してすべてのセンテンスを20のカテゴリーに分類した。各カテゴリー内に共通する記述主題は「」内に示しカテゴリー名とした。
- (3) 各カテゴリーを活動場面や共通する主題ごとにまとめ図示した。
- (4) (3)で作成した図を手がかりに考察をすすめた。

## III 結果及び考察

### 1. 各活動場面における学習者の感想

本実践においては、「リラクゼーション→糸電話をつくる→糸電話を鳴らす→糸電話を演奏しながら踊る→リラクゼーション→活動の振り返り」という一連の活動が展開された。このうち、ストリンググラフィそのものに関する活動をA「糸電話をつくる」B「糸電話を鳴らす」C「糸電話を演奏しながら踊る」とする。

以下に学習活動の展開にそって活動内容の詳細を示す。また、各活動場面に対応する学習者の感想文中のセンテンスを抽出し、それらを主題ごとに各カテゴリーに分類した結果を示す。

#### (1) 活動場面A「糸電話をつくる」

##### 活動内容

- ・ 2個の紙コップにそれぞれ3ヶ所(底面と側面2ヶ所)穴をあける。
- ・ 1つの紙コップの底面の穴に絹糸を通してボタンでとめる。糸は片結びをする。
- ・ 他方の紙コップの穴にも絹糸を通してボタンでとめる。糸はちょう結びをする。
- ・ 紙コップの側面の穴に止め具の針金をつける。
- ・ 両面テープのついたフックを、床や壁など紙コップを置きたい場所につけ針金をひっかけてコップを固定する。
- ・ 絹糸にバイオリン用の松ヤニを塗りつける。
- ・ ちょう結びをした糸の長さを延ばしたり縮めたりして音の高低を調節する。
- ・ もう一方の針金もフックで床や壁などに固定し、紙コップの位置を決める。

学習者の感想文の分類図を図1に示す。

糸電話をつくる

カテゴリー①「糸電話を作成した」

- ・今日は紙コップと糸を使って楽器を作るという授業だった。(G<sub>1</sub>)
- ・今日は、紙コップと針金・松ヤニなどを用いて弦楽器を製作した。(D<sub>1</sub>)
- ・糸電話を作り、その糸で音をならしてみようということをした。(J<sub>1</sub>)

カテゴリー②「身近な材料で作れる」

- ・「たけしのだれでもピカソ」というテレビ番組で、紙コップの楽器のを見たことがあって、その存在は知っていた。(E<sub>1</sub>)
- ・しかし、こんなに簡単に作れるものだということでは知らなかった。(E<sub>2</sub>)
- ・糸の部分にバイオリンの弦にぬる松ヤニをぬるという簡単なしくみだ。(G<sub>2</sub>)
- ・それだけで音がでるのだからすばらしい。(G<sub>3</sub>)
- ・簡単な道具で、簡単な作業で作れるので時間もかからず、しかも、自分の作った作品で演奏したり、鑑賞したりできるので、作りがいがあり、いい音が出た時の達成感を味わったり、うまくいい音を出すにはどうしたらいいかなど自分なりに工夫したりできることが分かる。(B<sub>1</sub>)
- ・身近なもので、いろいろなことが出来るし、いろんな体験ができるものだ。(E<sub>3</sub>)

カテゴリー③「音の高低や響きが生まれた」

- ・まず最初に、作る作業から行いが、音の調整を適当にやってしまった。(B<sub>2</sub>)
- ・糸の長さを変えることで高い音や低い音を作ることができるので、1人ひとりのオリジナルの楽器ができあがった。(G<sub>4</sub>)
- ・糸の長さで音階が変わるということはあたりまえなのだろうが、実際に音をあわせながら糸を調節しているとよく分かった。(J<sub>2</sub>)
- ・糸を短くすると高く、長くすると低くなり、みんな自分の好きな音ができるように工夫していた。(D<sub>2</sub>)
- ・糸の長さを変えて音は調節できたがひき方で音の高さが変わった。(A<sub>1</sub>)
- ・きつくもつと低く、ゆるくもつと高い音が出た。(A<sub>2</sub>)
- ・逆だと思っていたので音をきいたときおどろいた。(A<sub>3</sub>)
- ・松ヤニを塗ると摩擦力が大きくなり、音がよくひびいていた。(D<sub>2</sub>)

図1 活動場面A「糸電話をつくる」における学習者の感想

本実践では、「自分の手で素材の段階から表現媒体をつくる→できあがったものと自分のからだの動きを一体化させることによって自分の中のイメージに形を与える」という活動を1時間の中で体験できるよう、活動場面を設定した。活動場面A「糸電話をつくる」は「自分の手で素材の段階から表現媒体をつくる」という活動に相当する。

水嶋の演奏するストリンググラフィは通常C～Hとその派生音に合わせて音を調整してあるが、本実践では、音階にこだわらず「自分の気に入った音」を、耳と手を十分にはたらかせて作り出そうと提案した。それは、自分自身が感じたままに音をつくるという体験に浸らせたかっ

たからである。学習者達は、自分の感覚を頼りに、糸の長さや張り具合を工夫して「自分の音」をつくっていった。

学習者の感想文からは、紙コップや絹糸といった身近な素材が、簡単なしくみによって楽器へと変わっていく様子が読みとれる。学習者達は、「糸の長さを変え」たり糸を「きつく持っ」たり「ゆるく持っ」たりしているうちに、音の高低を変化させるしくみを発見し、「自分の好きな音ができるように工夫し」ていた。また「糸に松ヤニを塗る」ことで、どうしたら音の響きがよくなるかというしくみも発見している。またその過程で学習者は、音のしくみに対する驚きやすばらしさを感じたり、自分の行動や工夫に対してやりがいや達成感を感じている。そしてそれらの体験を通して、学習者は「身近なものでいろいろな体験ができる」ことを実感している。

学習者にとって「自分のつくった作品」である糸電話は、単に作品であるだけでなく、さらなる創造的体験を生み出す。それは、活動場面B「糸電話を鳴らす」で展開されることとなる。

## (2) 活動場面B「糸電話を鳴らす」

- どんな音がするか思い思いに探ってみる。

学習者の行動例：こする・はじく

- みんなの音と自分の音を調和させてみる。

音のバトンタッチをするように、ひとりずつ順番に鳴らしていく。

音楽を奏するような気持ちで即興的に鳴らす。

自分の前後の人が鳴らす音に調和するように、さりげなく一緒に鳴らしたり、演奏を止めたりする。

- 2人組で楽器を使って会話をする。

言葉を使わず、音で会話をしてみる。その後、どんな音にどんなイメージを感じたか、みんなで話し合う。

学習者の感じたイメージの例：鶏・蛙・悲鳴・虫・猿山など

- 2人組でイメージをもって演奏する。

2人でイメージを共有し感じ合いながら糸電話を即興的に演奏する。

学習者が表現したイメージの例：うしがえるのイメージ。低くて長い音。重い感じを表現したい

学習者の感想文の分類を図2に示す。

学習者達が完成させた糸電話は、糸に自分のからだがどう接触し離れていくか、という動作を工夫することによって、音の多様な表情を生み出すことができる。学習者達は、「糸電話を鳴らす」という活動の中で、そのことに気づいていった。

その過程が、図2のカテゴリー④「現象としての音からイメージ表現としての音へ」に分類された感想から読みとることができる。B<sub>3</sub>～B<sub>7</sub>とF<sub>3</sub>～F<sub>6</sub>の一連の感想には、その過程が顕著に表されている。両者は、音とイメージを重ね合わせることによって、はじめ雑音と感じられていた音が次第にイメージを表現している音として感じられるようになったという点で共通

糸電話を鳴らす

カテゴリー④「現象としての音からイメージ表現としての音へ」

- ・楽器を作って、それで音を出した時、はじめは正直雑音のように聞こえた。(F<sub>3</sub>)
- ・少しキーキーと自分にとってはいやな音のかたまりにすぎなかったが1人1人の演奏や、1人の演奏にそれとなく入り、それとなく出ていくようにした場合、それは、音楽となって聞くことができるようになったことが分かった。(B<sub>3</sub>)
- ・自分の楽器でいろんな音をだそうとしても、あまり変わりがなく感じられた。(F<sub>4</sub>)
- ・しかし、みんなで合奏をして、これが何の音に聞こえるかとじっくり考えると、少しずつイメージがわいてきた。(F<sub>5</sub>)
- ・一度イメージがわきだすと、あまり変化がないと感じていた自分の楽器でも、いろいろなイメージを作ることができ楽しかった。(F<sub>6</sub>)
- ・一番印象に残っているというか授業を受けていておもしろかったところは、2人組になって1つのことを表現するというところでした。(C<sub>3</sub>)
- ・それぞれ2人組になって弦をはじいて様々な感じを表現してみる。(C<sub>3</sub>)
- ・また、音を聞いて2人の会話・掛け合いは、様々な表現の仕方ができ、相手の言いたい事などがなんとなく分かるような感じができ、それに対して音によって返したり尋ねたりでき、またちがった表現の楽しさが味わえたと思う。(B<sub>5</sub>)
- ・この楽器を使って、2人組になり会話や演奏を楽しんだが、意外におもしろく、それぞれいろいろな弾き方をし、様々な音を作り出していた。(D<sub>4</sub>)
- ・その糸をこすることによっていろいろな音を表現できるものだと知った。(J<sub>3</sub>)
- ・イメージによる演奏は、またイメージをもつことで音楽が音楽らしくなっていたように思う。(B<sub>7</sub>)
- ・単調な音のはずなのに、聴き方1つで、いろいろなものの音に聞こえてくるから不思議だ。(E<sub>5</sub>)
- ・ただやるだけなら「キコキコ」と音を出していれば形にはなる。(K<sub>2</sub>)
- ・が、しかし、あの目的はさらに高い所にあり、そんな「キコキコ」と音を楽しむ次元のものではないような気がした。(K<sub>3</sub>)

カテゴリー⑤「音から感じたイメージ」

- ・糸をはじいて出した音は琵琶の音に似ていた。(A<sub>1</sub>)
- ・この楽器を一度ひいてでる音は1つではないと思った。(A<sub>10</sub>)
- ・いろいろな音が混ざっている感じがした。(A<sub>11</sub>)
- ・犬の鳴き声や、扉の音、風の音、波の音など。(J<sub>1</sub>)
- ・「カエルの鳴き声」「森」などを表現してみた。(C<sub>5</sub>)
- ・目をとじて耳をすませて聞いていると本当にそのように聞こえてきた。(C<sub>7</sub>)

カテゴリー⑥「イメージと共に身体表現が生まれた」

- ・イメージができるようになってきた時、はじめて楽器をひく時に体を使って表現しているような気持ちになった。(F<sub>7</sub>)
- ・低い、静かな音を出す時には体をふせ、小さくなり、楽しい音を出す時には体はずませた。(F<sub>8</sub>)
- ・これが今日の私の一番のダンスだったように思える。(F<sub>9</sub>)
- ・活動しているうちに、楽器から音を出そうとする動きもダンスになることに気づきました。(G<sub>5</sub>)

図2 活動場面B「糸電話を鳴らす」における学習者の感想

している。

一方、K<sub>2</sub>～K<sub>3</sub>は、この活動の目的<sup>註5</sup>を単に音を出して楽しむという「次元のものではない」と感じている。では、学習者達は内的にどのような「次元」で活動していたのだろうか。

活動場面Aでは、学習者達は主に目・耳の感覚と思考そして手をはたらかせてきたが、活動場面Bでは、それらに加えてイメージする力をはたらかせている。すなわち、身体感覚の次元と思考の次元にイメージの次元が加わったともいえる。具体的には、「一人ひとり糸電話を演奏する」「仲間と音で会話をする」「仲間と音で一つのテーマを表現する」という活動を通して、「何の音に聞こえるかとじっくり考え」たり、「イメージがわいてき」たり、「いろいろなイメージをつくっ」たり、「様々な感じを表現し」たり、「様々な音をつくり出し」たりしている。

なかでも、「仲間と音で会話をする」活動では、「相手の言いたい事などがなんとなく分かり、それに音によって返したり尋ねたり」もしている。イメージと共に音の表情を感じとることで、言葉によらないコミュニケーションが成立しているといえる。

カテゴリー⑤「音から感じたイメージ」からは、上記の活動の中で学習者がどんなイメージを感じていたかがわかる。具体的には、アコースティックな楽器音や動物の声、自然の音のイメージがあげられる。

カテゴリー⑥「イメージと共に身体表現が生まれた」からは、糸電話から音を出そうとするからだの動きそのものがダンスとなっていることへの気づきがよくとれる。それは、あるイメージをもって音を生み出そうとする心の動きがそのままからだの動きとなって表れたものである。F<sub>6</sub>の場合、「低い、静かな音」を生みだそうとする心の動きが「からだをふせ、小さくなる」というからだの動きとなり、「楽しい音」を生み出そうという心の動きが「からだをはずませる」というからだの動きとなって表現されている。また、このときにもイメージする力がはたらいっていることが、F<sub>7</sub>からわかる。イメージする力によって音とからだの動きによる表現が生まれ、「楽器から音を出そうとする動きもダンスになる」ことへの気づきが学習者におこったのだと考えられる。ダンスとは、必ずしも既成のステップや特定の動き—いわゆるダンステクニックから成立するものではない。「楽器から音を出そうとする動き」のような日常的な動作も、表現のコンテキストにおいては十分にダンスとなりうるのである<sup>註6 3)</sup>。

### (3) 活動場面C「糸電話を演奏しながら踊る～糸電話で演奏旅行～」

3人組でおこなう。2人がそれぞれの端を持って自由に動き回りながら部屋中を移動する。もう1人は他の2人のリードに応じて移動しつつ、糸に関わりながら自由に動く。糸を持つ人と弾く人は互いの動きを感じ合い、動きを展開するきっかけをつかんで役割を交代する。その際、言葉による合図などはしない。

学習者から生まれた動きの例：走る・まわる・糸を高く持ち上げる・糸の下をくぐる・糸を低く下げる・糸を飛び越える・糸をまたぐなど

学習者の感想文の分類図を図3に示す。



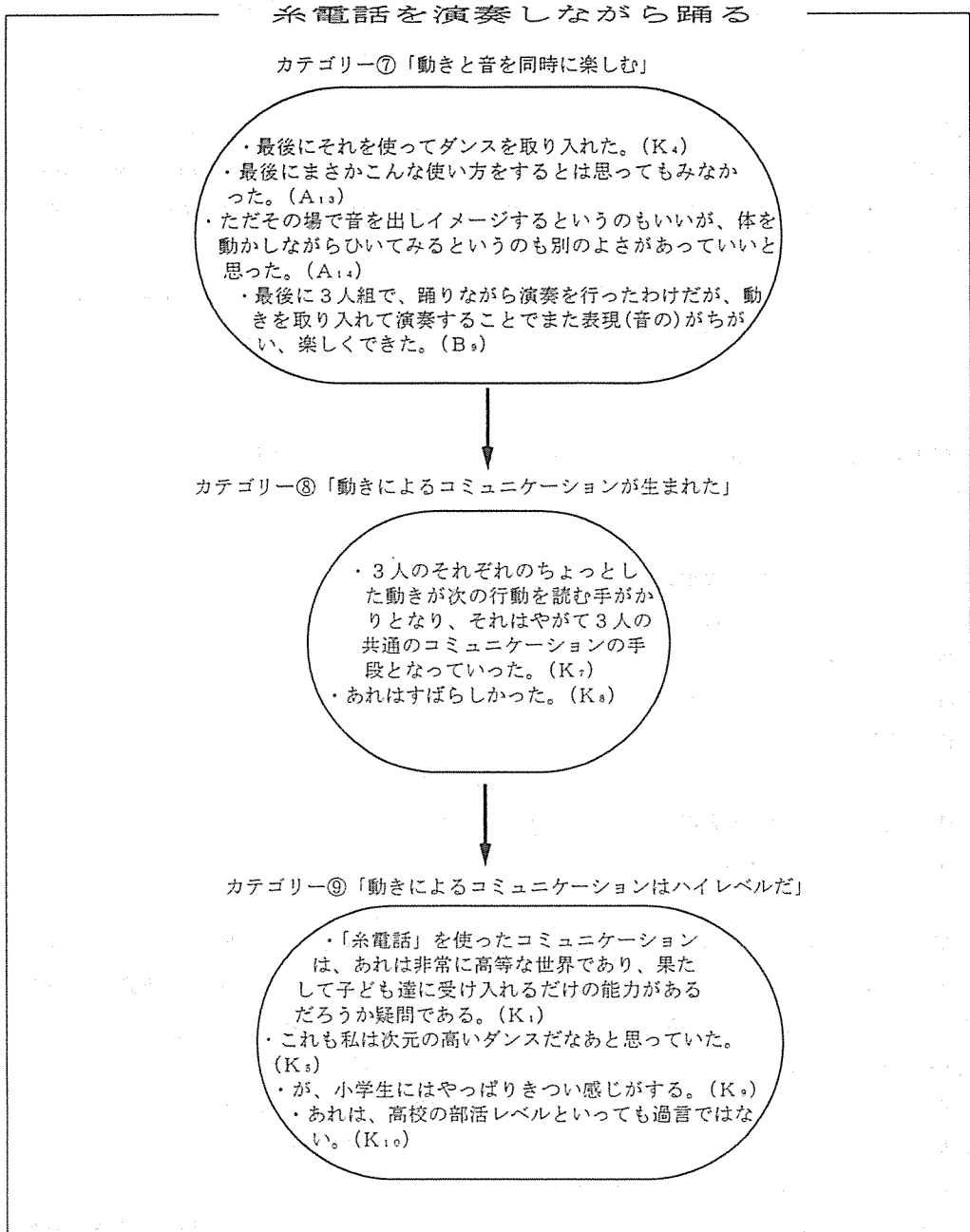


図3 活動場面C「糸電話を演奏しながら踊る～糸電話で演奏旅行～」における学習者の感想

上記のように、活動場面Cでのダンスは「走る」「まわる」「くぐる」などの日常的な動作によって成り立っている。ここで主な活動となっているのは、それぞれ即興的に動いている3人が1個の糸電話によってつながり、各自自由に動くと同時に互いに関わり合い、互いの動きに反応しあって動きを生みだし続けていくという「つながり合い」と「関わり合い」である。

カテゴリー⑧「動きによるコミュニケーションが生まれた」のK<sub>7</sub>～K<sub>8</sub>には、動きによっ

て人がつながり合い関わり合っていく様子が記されている。その様子を学習者は「あれはすばらしかった」と感じている。

しかし、その一方で学習者は、『糸電話』を使ったコミュニケーションは、(中略)非常に高等な世界であり、次元の高いダンス」であるとも感じ、「果たして子ども達に受け入れるだけの能力があるだろうか」という疑問を提示している。前述のように、この授業は教員養成課程の大学生を対象とした初等専門科目として開講されたものである。上記の感想から、学習者は自分が体験したことを「すばらしかった」と感じながらも、それだけにとどまっていないことがわかる。学習者は、自分が体験し感じたことを子ども達に伝えようとする立場を想定し、「果たして受け入れられるだろうか」と自分自身に問いかけているといえる。

## 2. その他

学習者の感想文を主題ごとに分類・考察するにあたって、個々の活動場面によって括りきれないカテゴリーも現れた。そこで、それらを主題によって括ることとし、以下の6つにまとめた。

- (1) 創造性・感受性・表現力に関する学習者の感想
- (2) 活動時における学習者の感情
- (3) 学習者が感じたダンスの捉え方の変容
- (4) スtringグラフィにおける知の様々な分野のつながりへの気づき
- (5) 活動主題の発見

次に、それぞれのカテゴリーについて、具体的な内容をみていくこととする。

- (1) 創造性・感受性・表現力に関する学習者の感想

学習者の感想文の分類図を図4に示す。

学習者達は、個々の活動場面や活動全体から感じた創造性・創造力・感受性・イメージ・発想・表現などについての感想を記している。D<sub>5</sub>からは、Stringグラフィを「創造性や感受性そして表現力を育てるには都合のよいもの」と考えていることがわかる。また、H<sub>5</sub>には、「自分を表現するようなことは今の時代大切なこと」との意見が記されている。

その一方で、学習者は、自分の創造力や発想力の限界を感じたり、表現活動によってイメージを伝える際に自分の伝えたいことが伝わったかどうかという不安を感じたりもしている。その多くは、仲間が糸電話を設置した場所を見たとき・仲間がつくり出した音色を聞いたとき・感じたイメージをみんなで話し合ったとき・みんなの前でイメージを音で表現したときの感想であった。仲間とともに行う一連の表現活動の中で、学習者は自分の力に対して限界や不安を感じていたことがわかる。他人と自分の関わりの中から生まれた感想であるともいえる。

また、D<sub>6</sub>~D<sub>7</sub>には、学習者が自らに「いろいろと決まっている所や枠をもうけてしまって」と記されている。この「枠」が何を意味するのかは興味深いところであるが、それに関する考察は後の機会に譲りたい。

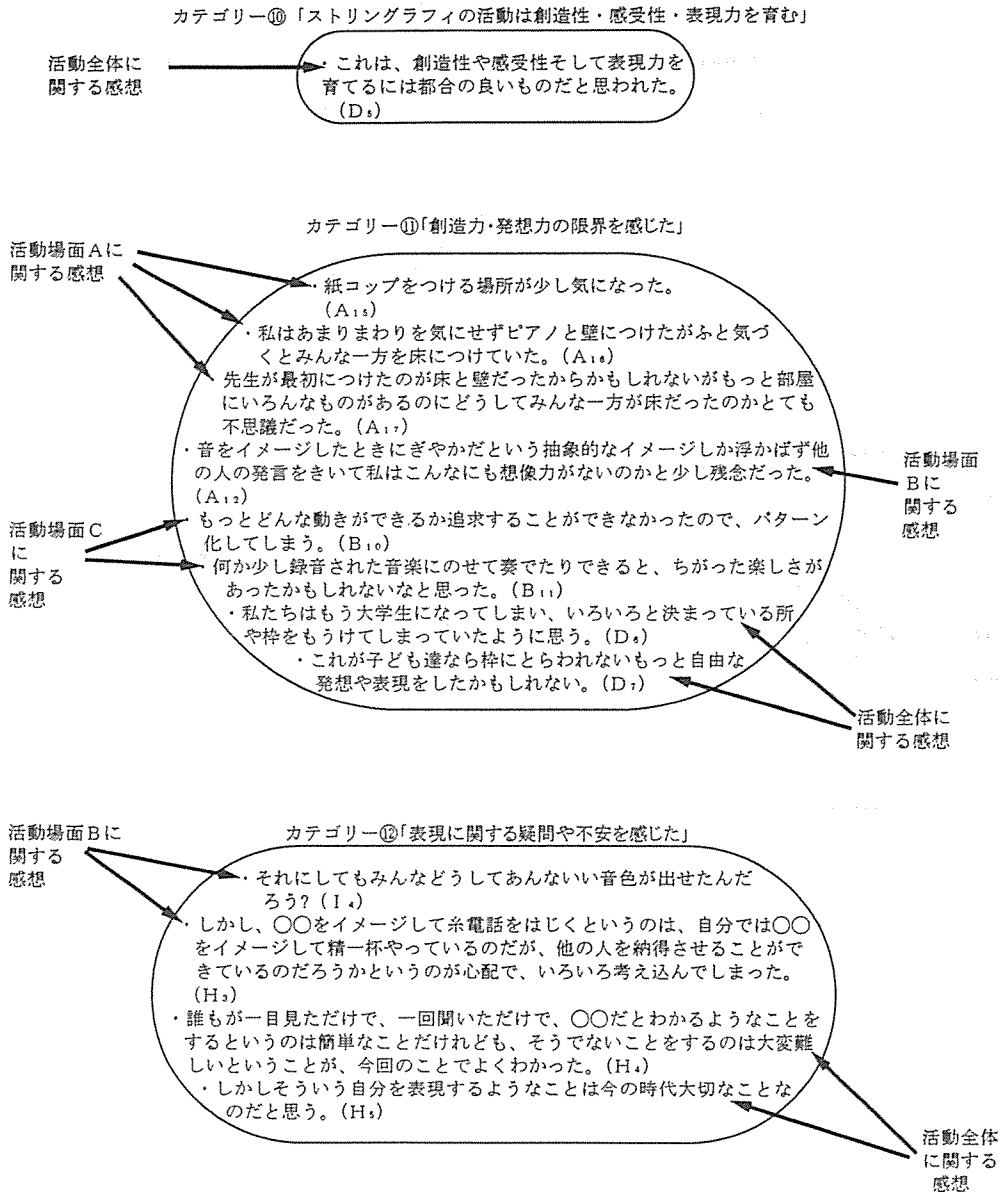


図4 創造性・感受性・表現力に関する学習者の感想

(2) 活動時における学習者の感情

学習者の感想文の分類図を図5に示す。

カテゴリ⑬「心が高揚した」⑭「楽しさや懐かしさを感じた」をみると、学習者達は「子どものようにはしゃいだり、「夢中になっ」たり、「とても楽しかった」と感じたりしていることがわかる。また、糸電話に対して「何か懐かしい気がした」り、以前同じ遊びをしていたことを今まで「すっかり忘れていた」ことに気づいたりしている学習者もいる。

その一方、カテゴリ⑮「照れや恥ずかしさが活動の障害になった」をみると、学習者達は

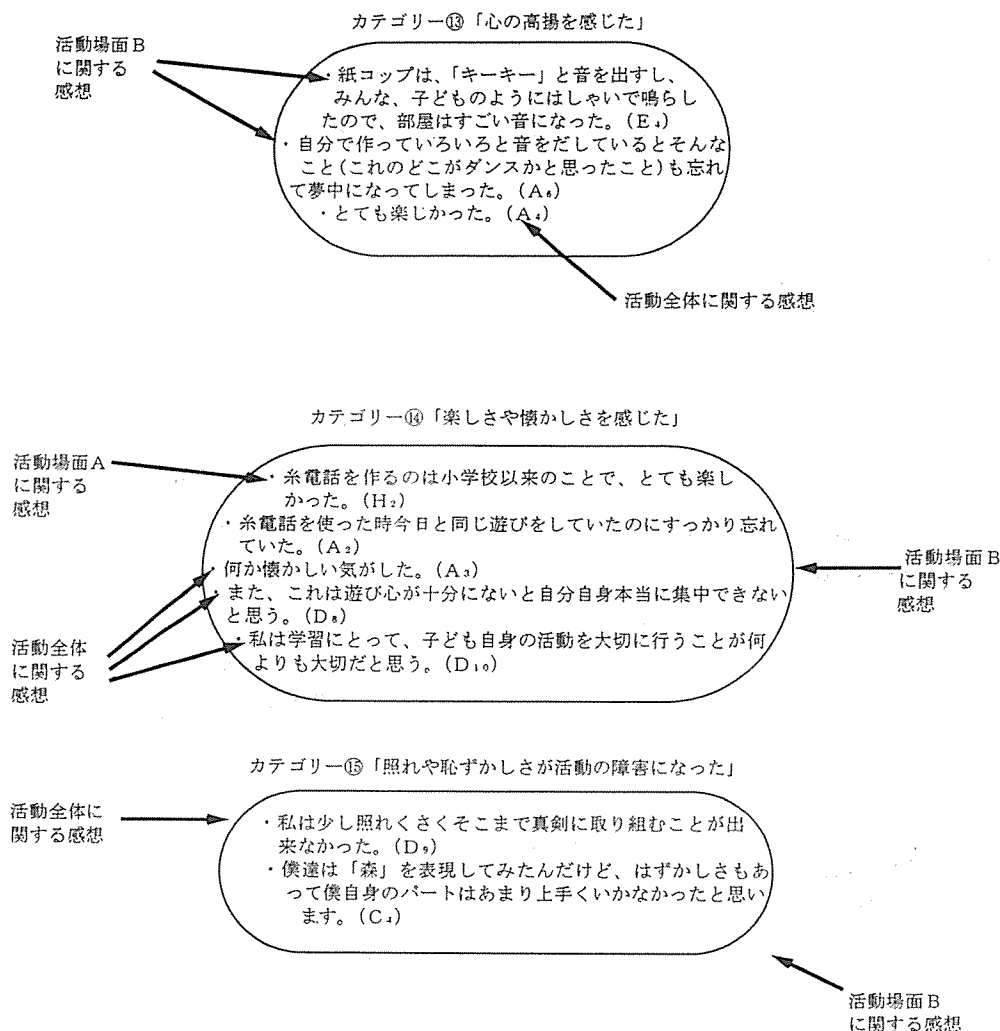


図5 活動時における学習者の感情

「照れ」や「恥ずかしさ」といった感情によって、「そこまで真剣に取り組むことが出来なかった」り、「あまり上手いかなかった」自分を感じている。

また、学習者Dの感想に着目し、D<sub>9</sub>からD<sub>8</sub>に遡って内容をみていきたい。D<sub>8</sub>には、ストリングラフィの活動について「遊び心が十分ないと自分自身本当に集中できない」と記されている。遊びの感覚を取り戻せるかどうかということが、活動の活性化に対して何らかのはたらきをしているといえるのかもしれない。

### (3) 学習者が感じたダンスの捉え方の変容

学習者の感想文の分類図を図6に示す。

Category 16 「それまで自分が抱いていたダンスのイメージとの違いにとまどった」をみると、学習者達は、本実践に出会ったとき、それまで自分が抱いていたダンスのイメージとストリングラフィの活動との違いにとまどいを感じていたことがわかる。しかし、Category 17

カテゴリー⑩「それまで自分が抱いていたダンスのイメージとの違いにとまどった」

- ・ダンスという体を動かして汗をかくというように考えていたので今日の活動内容を聞いたときはびっくりしました。(C<sub>1</sub>)
- ・「ダンス」というものはもっとう、秩序正しい身体運動といったようないかにもなイメージを持っていたので、紙コップとタコ糸(実際には絹糸)とフックで弦をつくってその音で楽しむ…なんて、もしこの講義をとってなかったら「音楽」か「生活科」か「図工」かくらいでやっとうか…ほどにしか考えずにいたかもしれません。(I<sub>2</sub>)
- ・はじめはこれのどこがダンスなのだろうかと不思議だった。(A<sub>3</sub>)
- ・ダンスという授業題目なのに、全くダンスっぽくない所に大変驚いた。(H<sub>1</sub>)
- ・最初は、これがダンスに何のつながりがあるのだろうか、と思った。(F<sub>1</sub>)
- ・「こんなのもアリなんだ」と戸惑いました。(I<sub>1</sub>)
- ・でもやっぱり「これもダンスなんだ」というふうには理解できないです。頭が固いなあ…我ながら。(I<sub>3</sub>)

カテゴリー⑪「ダンスの捉え方が広がった」

- ・しかし、やっていくうちに、これもダンスというものの1つかなと思いました。(C<sub>2</sub>)
- ・このような表現活動も、ダンスなのか。(E<sub>3</sub>)
- ・何かを表現しようとする動きは何らかの形でダンスにつながっていくのだろうと思った。(G<sub>1</sub>)

カテゴリー⑫「固定観念が崩れ『枠』が広がった」

- ・「体育はこうあるべきだ」という私の中の固定観念が崩れ「表現する」というもっと大きな枠へと考えが変わってきた。(G<sub>3</sub>)

図6 学習者が感じたダンスの捉え方の変容

「ダンスの捉え方が広がった」やカテゴリー⑫「固定観念が崩れ『枠』が広がった」をみると、学習者が感じたダンスの捉え方に変容が生じていることがわかる。

変容の様子を表わす一連の感想として、C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>、そして感想が他の図にまたがって分類されているがF<sub>1</sub>～F<sub>3</sub>、G<sub>1</sub>～G<sub>3</sub>があげられる。以下にその実際をみていく。

学習者Cは「ダンスというからだを動かして汗をかくというように考えていた」ので、「今日の活動内容を聞いたときはびっくり」した。しかし、自分の中のイメージをじっくりと引き出しながら全身の動きに至るといった活動の過程を経て、Cは「これもダンスというものの1つかな」と思うようになった。

学習者Fは、最初は「これがダンスに何のつながりがあるのだろうか」と思い、「ダンスというより楽しい工作のつもりで<sup>28)</sup>活動していたが、みんなで合奏をしているうちに「少しずつ

つイメージがわいてき<sup>29</sup>」、それによって、演奏しているときに「からだを使って表現しているような気持ち<sup>30</sup>」になった。Fは自分が出す音の表情をからだの動きで表現していたのである<sup>31</sup>。Fはこれらの動きを「今日の私の一番のダンス<sup>32</sup>」と評価している。

学習者Gはストリングラフィの活動を「図工か音楽の授業のようだ<sup>33</sup>」と思っていた。しかし、Gは『体育はこうあるべきだ』という私の中の固定観念が崩れ『表現する』というもっと大きな枠へと考えが変わってきた」と記している。Gは「何かを表現しようとする動きは何らかの形でダンスにつながっていくのだろう」と思い、活動しているうちに「楽器から音を出そうとする動きもダンスになる<sup>34</sup>」ことに気づいた。

これらの感想からは、本実践を体験する過程で、学習者達自身のダンスに対する捉え方が拡がっていった様子がよみとれる。

その一方で、I<sub>3</sub>にみられるように、「でもやっぱり『これもダンスなんだ』というふうには理解できない」という学習者もある。

(4) ストリングラフィにおける知の様々な分野のつながりへの気づき  
学習者の感想文の分類図を図7に示す。

カテゴリー⑩「知の様々な分野の要素を感じた」

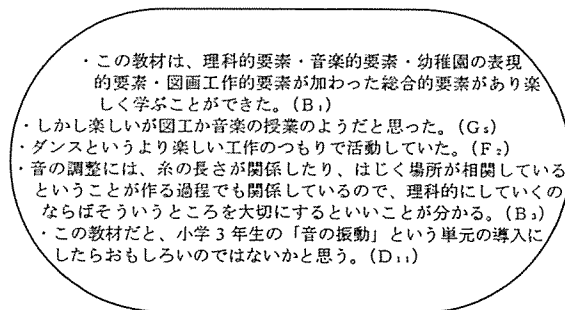


図7 ストリングラフィにおける知の様々な分野のつながりへの気づき

カテゴリー⑩「知の様々な分野の要素を感じた」をみると、学習者達は、ストリングラフィの活動から、様々な知の分野の要素を感じとっていることがわかる。それを端的に表しているのがB<sub>1</sub>の「この教材は、理科的要素・音楽的要素・幼稚園の表現的要素・図画工作的要素があり楽しく学ぶことができた。」という感想である。

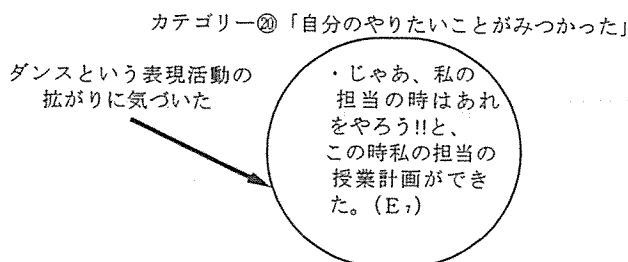
上述のように、本実践は主にA・B・Cの活動場面から構成されているが、それぞれの表現活動の主な素材は、活動場面Aでは「糸電話をつくる素材」と「物理的現象としての音」Bでは「イメージ表現としての音」Cでは「身体運動」である。これらの活動場面は、あたかも活動の展開とともに主旋律を交代しながらハーモニーをなすかのようにつながり合って、1時限の活動を構成している。すなわち、ストリングラフィの中で互いにつながり合っている知の分野は、それぞれが「部分」でもあり同時にストリングラフィという名の下に統合された一つの「全体」でもある。学習者達は各々、部分に焦点をあてたり全体に焦点をあてたりするなかで、ストリングラフィが内包する様々な知の分野の要素を感じとっているといえる。

また、学習者Bは「音の調整には、糸の長さの関係したり、はじく場所が相関しているとい

うことが作る過程でも関係しているの、理科的にしていくのならばそういうところを大切にするといいことが分かる。」と記している。すなわち、Bが本実践を通して分かったのは、自分が焦点をあてた知の分野に応じて、それにふさわしい活動を選択し、ふくらませたり深化させたりして活動を展開させればよいということである。ホリスティックな教育活動においては、それぞれの部分は互いにゆるやかにつながり合っているの、焦点をあてた部分を全体のつながりの中で状況に応じてふくらませていくことができる。Bはこのことを体験的に感じとっているといえる。

#### (5) 活動主題の発見

学習者の感想文の分類図を図8に示す。



学習者Eは、本実践の体験を通して自分のやってみたいことを発見している。カテゴリー②「自分のやりたいことがみつかった」に分類されているセンテンスだけではやや唐突な感があるので、Eの記した感想文をE<sub>1</sub>からE<sub>6</sub>まで遡って、発見に至る内的な過程を追ってみたい。学習者Eは「糸電話を鳴らす」という活動の中で、「単調な音のはずなのに、聴き方1つで、いろいろなものの音にきこえてくるから不思議だ<sup>2E15</sup>」と、イメージの力の不思議さを記し、続いて「このような表現活動も、ダンスなのか<sup>2E16</sup>」と、表現活動としてのダンスの拡がりに気づいている。Eは「じゃあ、私の担当の時はあれをやろう!!」と、自分のやってみたいことを発見し決定する。その後Eが実際に企画し実践した活動は、部屋いっぱいにはげた白い紙の上を、絵の具をつけた手足で音楽とともに踊りまわる「アクションペインティング」であった。これは、色・形・音・動きといった様々な要素が関わり合いつながり合っているものである。Eもまた、自ら企画した活動の主題にホリスティックな表現活動を選んだのだといえる。

#### IV おわりに

以上、学習者が提出したすべての感想文を、分類図を手がかりに分析してきた。その結果、学習者が具体的な活動場面から様々なことを感じたり、自分自身の体験や感想に触発されて気づきを深めたりしている様子を読みとれた。

学習者が感じたり気づいたりした事柄を、ホリスティックな教育観と照らし合わせてまとめると以下のようなだろう。

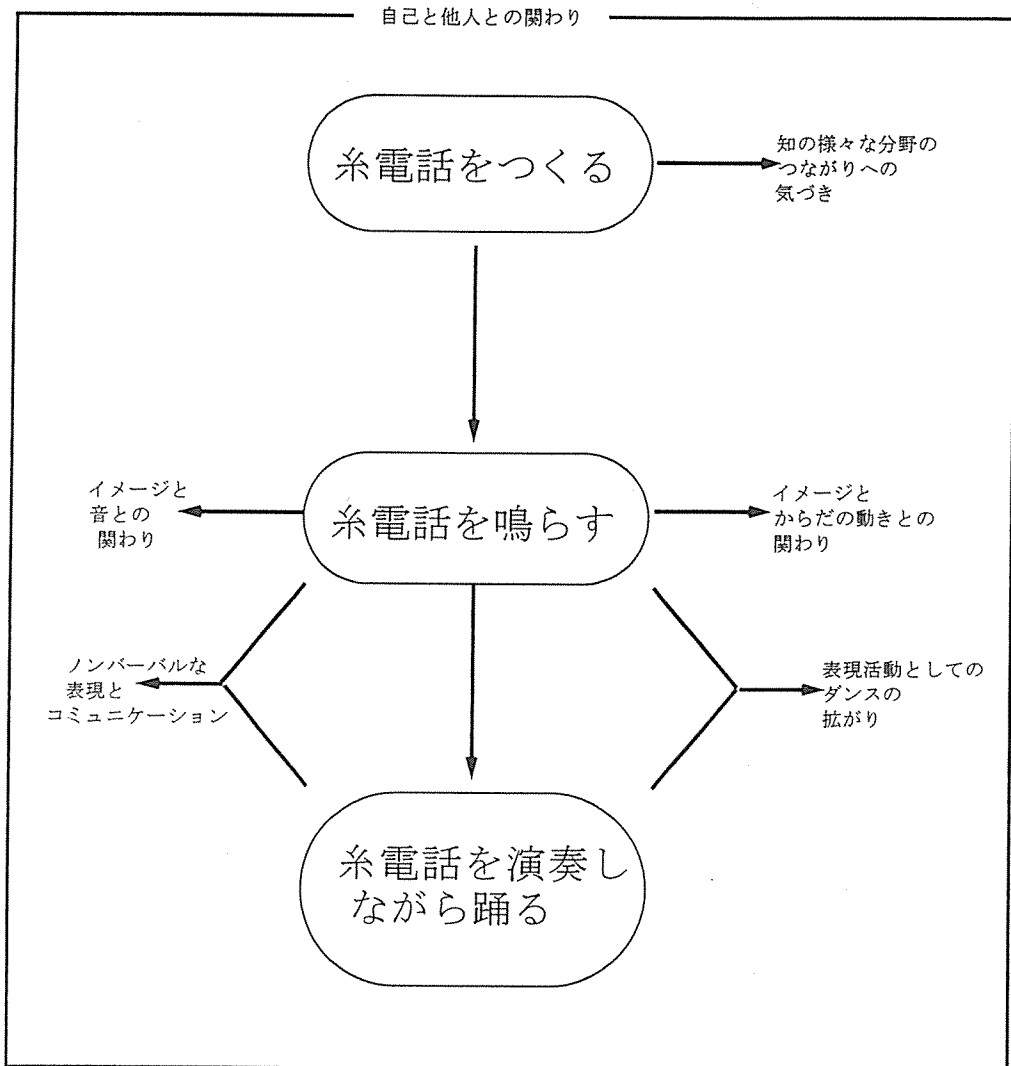


図9 スtringグラフィの活動から学習者が感じとったこと

- ・主に「糸電話をつくる」活動を通して「知の様々な分野へのつながり」に気づいた
- ・主に「糸電話を鳴らす」活動を通して「イメージと音の関わり」と「イメージとからだの関わり」を感じた
- ・「糸電話を鳴らす」活動と「糸電話を演奏しながら踊る」活動を通して「ノンバーバルな表現とコミュニケーション」「表現活動としてのダンスの拡がり」を感じた
- ・すべての活動は「自己と他人との関わり」の中で行われた。

したがって、本実践におけるStringグラフィの試みは、ダンス教材の開発にあたって、ホリスティックな教育の理念をある程度具体化することができたと評価できよう。しかし現在のところ、教材化においてはなお試行段階にある。今回は一時間完結の単元としての実践であったが、学習活動をさらに展開する方法を考えることもできる。活動の行き詰まりに対する支援



の方法については、今後も実践を重ねる中で、個々の学習者の性質と状況に応じて検討していかなければならないだろう。また、学習者から提示された課題である「ストリンググラフィは子ども達に受け入れられるか」についても検討する必要がある。

前述のように、本研究は萌芽的段階にある。私達のからだは自分自身が生きて存在していることの証であるといえる。このからだというものを中核にして、スピリチュアルなレベルにおける自己の変容と成長をも見通したホリスティックな教育活動を実践することは可能なのか。またその具体化のためには何をどうしたらよいのか。おそらくそのヒントは、教科の境界を超えてつながり合ったところに見出されるのではないか<sup>4)</sup>。その教材化の試みはまだ始まったばかりである。多くの方々のご教唆がいただけることを願って本稿を締め括りたい。

#### 註一覧

- <sup>1</sup> 諸科学及び芸術を含む。
- <sup>2</sup> ここでいう「生命」とは、からだ・こころ・魂が一体となって存在している生命の意である。
- <sup>3</sup> この科目は平成8年の学部改組以前の旧カリキュラムにおいて開講されているものであり改組以降の新カリキュラムにおいては存在しない。新カリキュラムでは、体育科に関する初等科目は「体育科概説」として統合され、その結果、1種目あたりに割り当てられる授業時数は、旧カリキュラムでは13週であったのに対して、わずか3週と大幅に削減されている。すなわち、旧カリキュラムが適用される最後の学年である平成7年度の入学生が4年生となった平成10年度の体育科初等科目「ダンス」は、筆者にとっても学生にとっても、実質上、半期まるごとをプログラム・教材開発のために費やせる初等科目最後の授業であったといえる。
- <sup>4</sup> 第3時以降は、その時限に行う活動を学習者自身が企画し、指導した。すなわち、毎時1～2名の担当者が、授業担当教官の助言と支援を得ながら、その時限の活動内容をクラスに提案し実践した。誰がいつ担当するのかは、オリエンテーション時に決めた。全ての学習者が1回ずつ企画と指導を体験した。学習者の感想文中にみられる「私の担当の時は…」という記述はこのことを指している。
- <sup>5</sup> この授業は「目標探求型」の学びとして実践された。したがって、学習者一人ひとりが各々自分自身の活動の目的を見つけ出したり感じとったりすることとなる。
- <sup>7</sup> ポストモダンダンスなどではむしろダンステクニックを排除し日常的な動きを用いることでダンスを成立させている。
- <sup>8</sup> 図7中のカテゴリー⑭におけるセンテンスF<sub>2</sub>参照
- <sup>9</sup> 図2中のカテゴリー④におけるセンテンスF<sub>2</sub>参照
- <sup>10</sup> 図2中のカテゴリー⑥におけるセンテンスF<sub>7</sub>参照
- <sup>11</sup> 図2中のカテゴリー⑥におけるセンテンスF<sub>8</sub>参照
- <sup>12</sup> 図2中のカテゴリー⑥におけるセンテンスF<sub>9</sub>参照
- <sup>13</sup> 図7中のカテゴリー⑭におけるセンテンスG<sub>2</sub>参照

- <sup>14</sup> 図2中のカテゴリー⑥におけるセンテンスG。参照
- <sup>15</sup> 図2中のカテゴリー④におけるセンテンスE。参照
- <sup>16</sup> 図6中のカテゴリー⑰におけるセンテンスE。参照

#### 参考文献一覧

- 1) ジョン・ミラー著吉田敦彦・中川吉晴・手塚郁恵訳『ホリスティック教育』春秋社. 1988.  
ホリスティック教育研究会編『ホリスティック教育入門』柏樹社. 1995.  
ジョン・ミラー著吉田敦彦・中川吉晴・桜井みどり訳『ホリスティックな教師たち』学習研究社. 1997.
- 2) 水嶋一江『Studio Eve Profile』Studio Eve. 1996.
- 3) 細川江利子「現代の舞踊」舞踊教育研究会編『舞踊学講義』大修館書店.1991. pp.52-61.
- 4) 金田卓也「ホリスティック教育と芸術教育の交錯点」『季刊ホリスティック教育』第5号.  
1997. pp.19-24.